くじゅう坊ガツル地域の水生動物

鳴子川の景観

坊ガツルを流れる河川は、鳴子川の最上流域にあたります。この川は大船山の山麓に端を発し、湧水や伏流水を集めて大船山の登山道に沿うように流れ下り、途中で法華院方向からの支流を合流しながら、坊ガツルの湿原のやや西寄りをほぼ南から北の方向に流れ下っています。

この鳴子川の最上流域に図に示したように本流５、支流２の７調査地点を設けて、そこに生息する水生生物を調べました。

水生動物の調査点

ほぼ中性の水質にヒゲナガカワトビケラが生息

各調査地点での流水のpH値は６.１～７.３の７前後でほぼ中性であるといえます。ここでは２か所について概要を述べます。まずNa.１ですが、この地点はいちばん源流に近い調査地点の最上流部で、アセビなどの灌木の間を木漏れ日を受けながら湧水を集めて流れ下っています。また、Na.３は本流と支流が合流して流れ下った地点で、両岸には湿原が続いています。

この両地点に共通して多くみられた水生生物は、カゲロウのなかまのヒメフタオカゲロウ、トビケラのなかまのヒゲナガカワトビケラなどの水生昆虫の幼虫で、その他わずかですがグマガトビケラも生息していました。その他、Na.１ではオナシカワゲラのなかまやウスバガガンボなどが、Na.３では多くのエルモンヒラタカゲロウとわずかながらヘビトンボ、ギフシマトビケラ、ガガンボ、ニッポンヨコエビが生息していました。

調査地Na.1の景観

調査地Na.1の動物相

調査地Na.3の景観

調査地Na.3の動物相

湿原中の湧水の流れにタカハヤが生息

鳴子川の本流を、下流域から調査地点Na.４までの間、投網による魚類の捕獲を試みましたが、１種類も生息を確認することができませんでした。ところが調査地点Na.３付近に流れ込んでいる湧水の細い流れのなかに幼魚から成魚までの多数のタカハヤが生息しているのを発見しました。この流れにはところどころに幅50cm、深さ70cmほどの深みがあり、多数が生息していました。草原から水面に落ちてきた昆虫などの餌、冬でも湧水による安定した水量と水温がタカハヤの生息にとって適していると考えられます。鳴子川本流は豪雨時にくじゅう連山からの大量の降水が押し寄せ、大洪水になることから、魚類の生息にとってはきびしいのではないかと考えられます。

湧水の流れに生息しているタカハヤ